

---

# 少女とドラゴン

青あき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女とドラゴン

### 【Zコード】

Z9328V

### 【作者名】

青あき

### 【あらすじ】

少女視点。残酷な描写は、死の表現です。初投稿。  
淡々と。一人の少女と一頭のドラゴン。少女の想い。

(前書き)

ドリームと少女の続編です。  
先にそちらを読んで頂けると幸いです。

少女は、山を下りていた。

いつもは小さな籠を腕から下げて通る道を、この日は黒い塊を抱えて通った。

木苺の生っている場所を通り、川を通り、美味しい実の落ちている木のそばを通り、湿った道を通り。

黒くて、生温かい塊を、落とさないように大切に抱えながら、ゆっくりとしゃがみ込んだ。

もうすぐ、少女は自分の生まれた村につく。

家族のいない、村に辿り着く。

少女は、この黒い塊を村長のところに届けなくてはならない。

手にした瞬間、自分の宝物になつたこの塊を。

そして、村長に渡したら、剣を持つて帰らなかつたことを怒られるのだろう。

どこのを、殴られるのだろう。

少女の母に似たらしい顔だけは傷付けたくないようだから、頭か顔のどちらかだろ？。

ほんやりと、少女は考える。

抱えている塊は、まだ生温かい。

きつとこの塊を届けた後は、少女の日常は季節を一つ廻る前と同じものになる。

小屋で眠り、山に入り、籠いっぱいに食べ物を入れて、村に戻り、食べ物を村長の家の門の前において、また山に入り、籠いっぱいに食べ物を入れて、村に戻り、村長に籠を渡し、その中の食べ物を少しだけ渡され、小屋で寝る。

季節が一つ廻る、その間が特別だったのだ。

ドリゴンに出会い、ドリゴンの近くに行き、ドリゴンを間近で見ることが出来た。

その間が、特別過ぎたのだ。

そして、その特別な時間が戻ることはない、もつ一度もない。

少女自身が、その時間を終わらせたのだ。

ぱたり。

ぽたりと、黒い雲が少女の肘を伝い、地面に落ちる。

この腕の中にある塊が、あの時間が戻らない事を教えるのだ。

少女は、気付いていた。

初めてドラゴンを見たときから、気付いていた。

ドラゴンは、少女を見ても動かなかつた。

ドラゴンは、少女が近付いても、動かなかつた。

ドラゴンは、少女が立ち去つても、動かなかつた。

ドラゴンは、少女が持つていったものも、口にあるものも何も食べず、少しづつ、痩せて行つた。

ドラゴンが死ぬ気なのだと、少女は最初から気付いていたのだ。

それでも少女がドラゴンの許に通つたのは。

ドラゴンの許に、食べ物を置きこなしていたのは。

ただ、ドラゴンが飛ぶ姿を見たかったから。

降り立つ前に見た、空を覆うほど大きな身体が、空を飛ぶ姿を見たかったから。

そして、出来ることなら

その願いは敵うことなく、物言わぬ塊は、少女の腕に抱えられるほど小さい。

あれほど、大きかったのに。

少女は、考える。

どうすればよかつたのか。

きっと、ドライゴンは気付いていたのだ。

少女が、ドライゴンを殺そうとしたこと。

だからきっと、木苺を初めて食べててくれたのだ。

少女は、だからこそわからなかつた。

手向けとして、食べててくれたのだと思ったのに。

なぜ、少女の手で死んだのか。

飛び立つてくれなかつたのか。

殺されて、くれたのか。

少女は、塊を見る。

もうそれは、冷たくなつていて。

冷たく、硬くなり始めていて。

腕を伝つていて黒い雫は乾き、本當に、ただの黒い塊になりつつある。

ぽたりと、雫が落ちる。

透明な雫は、黒い塊を伝つ。

少女は、泣いた。

「めんなさい」と、小声で声を出しながら泣いた。

「めんなさいと、ただただ繰り返した。

行かなければよかつたのだ。

ドラゴンのところに行かなければ、きっとドラゴンは、自分の望む  
ように死を迎えたのだろう。

少女がいなければ、ドラゴンはもっと長生きできただろう。

少女がいなければ、心臓を抜き取られず。

少女がいなければ、痛みもなく死ねたはずだ。

少女がいたから。

ドラゴンの許に向かう少女を追つたから、村人はドラゴンを見つけ  
た。

ドラゴンの近くに行く少女を見たから、村人はドラゴンが動かない  
事を知つた。

ドラゴンに食べ物を置く少女がいたから、村人は少女に命令をした。

生きてほしいと思つたドラゴンを殺したのは。

生きてほしくと望んだドランを死なせたのは。

全て、自分のせいだったのだ。

「めんなさい」と、少女は泣く。

「めんなさい」と、少女は、ただ。

ひたすらに、泣いて。

泣いて、謝つて。

謝つて。

自分の無力さと、生きたがる心を、嫌悪した。

殺したくないと言えなかつた自分を。

殺されたくないからドランを殺した自分を。

弱いだけの自分を。

繰り返し、何度も謝りながら、自分を呪つた。

塊は、何も言わず。

「うすす、うすす」と空が明るくなり始めたころ、少女は涙を拭つ。

石のように硬くなつた塊を、大切そうに抱えながら。

少女は、ゆっくりと歩き出す。

向かうのは、山の頂。

一步一步、いつもの倍の時間をかけて進む。

木の実と、草、魚に、木苺。

一つずつ、持つて行く。

朝日が差す頂きは、美しく。

石になつたドラゴンは、眠つてゐるよつて穏やかに見え。

そのそばに、少女は持ってきたものを置く。

真っ黒な石のよじになってしまった心臓を、ドーラゴンの胸に。

そのそばに捨てた剣を、拾い上げ。

白銀だつた剣が黒く染まっていたことに、少女は嬉しそうに笑い。

光を浴びながら、少女は胸に剣を突き立てた。

小さい頃、誰から少女は聞いたのだ。

この世界には、神様と言つものがいて。

その神様と言つものがいるところに、死んだものは向かひりしき。

その場所は、とても幸せな場所なのだと。

優しい声で、話してくれた。

もしかしたら、あの声は、ハハオヤなのかもしれない。

薄れゆく意識の中、少女は思つ。

もし、本当に神様と言つものとのじりか、死んだものがすべて向かうのな。

ドラゴンも、そこに行けるのだろうか。

少女も、そこに行けるのだろうか。

ドラゴンのやばで、同じように死ぬことが出来れば。

同じところに、行けるかもしね。

もし会えたら、少女は言つのだ。

ドラゴンの飛ぶ姿を見たいと。

そして。

そして、一緒に生きてほしこと。

あえたらここな。

吐息にしかならない声で、少女は、幸せをつかんでいた。

剣を胸に突き立てた少女は、おひへつとジャパンの胸に倒れこみ。

静かに、息を引き取つた。

(後書き)

少女はきっと、死ぬことが救いだとは思っていません。

それでも、大切な存在と共に居たかったのだと思います。

同時に、そんな存在を殺してしまった自分への失望と、気付くことが遅かつたことへの絶望を抱えて生きることが出来なかつた。馬鹿な子なのかもしれません、少しでも愛してもらえたなら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9328v/>

---

少女とドラゴン

2011年10月8日23時24分発行